

# Dr. 中路の健やか通信 (其の37)

健やか協力隊長 中路 重之

## 第37回 タバコと健康 (その6)



小学生のころ、わが家の居間に石原裕次郎のカレンダーが貼ってありました。すでに大スターでした。「コウジロウの股下は1メートルもある」といううわさの他に、「彼は、1日にタバコを3箱は吸う。カッコいい!」、そんな話題で世間は盛り上がっていました。スターはスクリーンでもポスターでも、いつもタバコを手にしていました。最近の映画やテレビドラマでは、世論の厳しい目のためか、喫煙シーンはなくなってしまいました。

ただ、正直に告白すれば、タバコに火を付けて、渋めの表情で喫煙する男性の所作を「カッコいいなあ」という気持ちが私の中にはまだあります。それは、私自身に喫煙経験がなく、それ（喫煙）を越さないと大人の仲間入りができなかったという、高校時代の感覚がまだ残っているからだろうと思います。

女性の喫煙はといいますと、これも、細くて長いおしゃれなタバコを吸っている女性を、魅力的だなあと思う気持ちが少しあるのは確かです。

しかし、しかしです。健康の話になると単なるカッコよさでは何一つ語れなくなってしまうのです。最近、女性ドライバーがタバコを吸っている姿をよく目にします。

統計的には、それほど増加しているわけではありませんが、男性と異なり低下傾向が緩やかです。例えば、日本たばこ産業の調査では、1989年の喫煙率は、20代16.4%、30代14.7%、40代13.8%に対し、2018年は20代6.6%、30代11.1%、40代13.6%です。低下の一途にある男性喫煙率とは対照的です。

若い女性の喫煙の何が問題なのでしょう。それは、この年齢の女性が妊娠と出産を控えているからです。

旧黒石保健所の2000年の発表によれば、喫煙妊婦の早産（44%）は非喫煙妊婦の早産（21%）の2倍でした。また、喫煙妊婦の59%が低体重児（2500グラム未満）を出産していました。さらに、1998年の管内の乳児（1歳未満）死亡は、すべて低体重児でした。

妊婦の喫煙が、早産、低体重児出産、新生児・乳児死亡の確率を高くすることは今や常識です。

3年前に公表された米国CDC（疾病予防管理センター）の大規模研究の結果です。2002年に米国で生まれた335万人の赤ちゃんについて調べたものです。出産前に母親が喫煙することによって生じる早産や低体重児出産などのリスク（何倍か）を計算しました。

例えば、出産前に喫煙していたお母さんの赤ちゃんは、喫煙していないお母さんの赤ちゃんに比べて、低体重児が2.3倍多く、ましてや、乳幼児突然死症候群（元気だった赤ちゃんが、事故や窒息ではなく、眠っている間に突然死亡してしまう病気）のリスクが2.7倍とは驚くべき事実です。



もう一つの問題は、物心ついてからの母親の影響です。2011年、青森県は県内全域の小学生～高校生約4万人に対して喫煙実態調査を行いました。その結果、両親が喫煙している児童生徒の喫煙率は明らかに高く、しかもその影響は父親より母親の方が大きかったです。

青森県の若い女性の喫煙率はどうでしょう。2010年の国民生活基礎調査によれば、20代、30代の喫煙率はともに47都道府県中第1位でした。

本当に残念な話ですが、青森県の妊娠世代の高喫煙率が、早産や低体重児の出産を増やし、新生児死亡率や乳児死亡率を高くして、青森県の短命の一因になっていることは否定できそうもありません。つまり、この年代の女性が禁煙することで、間違いなく青森県の寿命は長くなるのです。

若い女性の喫煙者に申し上げたいことがあります。「寿命」や「乳児死亡率」などのややこしい話ではありません。この問題の本質は、「赤ちゃんの不幸は、赤ちゃん自身、そしてお母さん自身にとって、悲しい出来事である」ということなのです。

